今や復興途上にある帝都と共に宗教家が復興と相俟つて愈々現代の墮落した宗教界を改造すべき時である奮起せよ、本化門下の青年宗教家よ一天四海皆歸妙法の理想に生きる吾等第二の日蓮たるべきを自覺せよ、所謂大上人訓誡叱咤された「佛法ヲ學シ謗法ノ者ヲセメズシテ徒ラニ遊戯雜談ノミシテ明シ暮サンハ法師ノ皮ヲ着ケタ畜生ナリ」との徒になる勿れ。二陣三陣續けよの御聖訓を奉載して世界の柱世界の眼目世界の大船と自覺し奮起する宗教家の現れんことを吾人は要求するのである。

『涙』

深　敬　道　人

「涙」!!

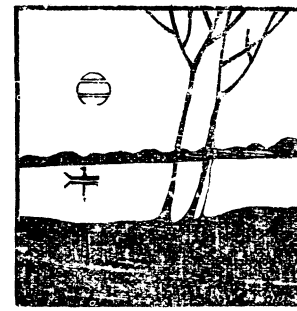
それは善か惡かは知らないが、それが感情の發露であり表現である事を私達は認識せずにはいられない。何時か私は或る婦人雜誌で「涙は婦人の武器なり而して如何に此の涙によつて男子をして墮落の巷に迷はしむる事よ」こう云つた意味の記事があつた樣に記憶する。

小供と婦人とは涙に於て否涙脆いといふ事實に於て程度迄の共有點を持つてゐる樣に私は考へる。而し小供は單純な感情に支配されての涙であるが婦人の涙の或る一面が男子をして墮落の巷に立たせるの涙であるとはげに恐るべき事である。總てをこうした感情の表現たる涙を以て事を處理して行かうと云ふ事は誤つてゐる。そして總てが涙を以て解決されるならば此の世は涙を以て滿たされるであらう。而しよく考へると此の涙がその善惡に係らずその問題を容易に左右する事が出來る偉大な力を持つ事實を、私は或る程度迄これを認識し肯定したいが、その問題その事件をして前途幸ある解決を與ふるや否やは問題である。

私は一途に涙を以て事を處そうとする考を否むと共に涙が單なる純潔な感情の發露としてでない涙!そう

した罪惡的な至純ならざる涙を否定したい。

涙は神聖であり、侵すべからざるものである。至純でなくてはならない。眞の感情の發露として表はるべきものでなくてはならない。（大正十三、二、二七稿）



靜寂を破る響

吉　益　正　光

にはかに眼界が開けたと思つたら最早中腹に迄來て居た。まだ降りたらぬのか灰色の雲は空一杯になつて居る。昨夜聲なく降つた雪は今日この墟落を玉山銀臺と化せしめた。

太陽は西嶺に度り、ひややかな斜陽は時々灰色の雲をとほして、郡山を照す、實に靜寂だ。

騷しい物音は一つも聞えない。そして目に入るものは冬枯のさびしき山々、峯々と、それを被ふ清淨の雪や、夕飯を急ぐ煙だけである。子供等も遊びつかれたか、家路へ、三々五々、依々として去つた。廣い天地何の響もしない。沈寂を破つて木鐘の音が山下より起つた。嗟夫、ゆかしき木鐘の音、それは今猶、聖祖時代の清淨を語るが如く聯々として、つゞいて居るのだ。此土は安穩にして天人常に充滿せるを狂子に知らさんが爲に朝に、夕に、響いて居るのだ。嗟夫幸福なのは我等だ、そして草木だ。

終日、實相眞如のみ法を貪り。草木によられし聖者のみあとを慕ふ。廣大無邊な、み佛の慈悲も我等には